

2020年5月7日付 韓国環境部プレスリリース

## 野生イノシシ ASF 疫学調査中間結果の公開

<http://www.me.go.kr/home/web/board/read.do?pagerOffset=0&maxPageItems=10&maxIndexPages=10&searchKey=&searchValue=&menuId=286&orgCd=&boardId=1369600&boardMasterId=1&boardCategoryId=&decorator=>

- △非武装地帯近隣境界地域に最初に侵入
- △ASF ウイルスは全て遺伝型Ⅱ (GenotypeⅡ)
- △フェンスは ASF 拡散の遮断・遅延効果あり

環境部所属国立環境科学院 (院長チャン・ユンソク) は、国内野生イノシシ ASF の発生原因や伝播経路等を分析した疫学調査中間結果を5月7日に公開した。

今回の疫学調査は、昨年10月2日、第1例目となる野生イノシシの死体からの ASF ウイルス検出事例発生以降、国内で発生した 585 例を対象に実施された。国立環境科学院は科学的で効率的な対策準備の根拠を提供するため、疫学調査班\*を組織し、今回の中間結果を分析した。

\*疫学調査班:大学教授、イノシシ専門家、関連機関専門家等 20 人余りで構成

疫学調査中間結果の詳細は次のとおり。

2019年10月2日から2020年4月30日の期間中に全国的に採取した野生イノシシの検体 16、809 件を検査した結果、585 件 (約 3.5%) から ASF ウイルスが検出された。

16 市/道、177 市/郡/区のイノシシ検体のうち、坡州 (パジュ)、漣川 (ヨンチョン)、鉄原 (チョルウォン)、華川 (ファチョン)、楊口 (ヤング)、高城 (コソン)、抱川 (ポチョン) の 7 市/郡で ASF ウイルス陽性事例が確認された。

地域別陽性件数 (検出率) は、漣川 (ヨンチョン) 230 件 (39.3%) が最も多く (高く)、次いで華川 (ファチョン) 222 件 (37.9%)、坡州 (パジュ) 96 件 (16.4%)、鉄原 (チョルウォン) 29 件 (0.5%)、楊口 (ヤング) 3 件 (0.5%)、高城 (コソン) 3 件 (0.5%)、抱川 (ポチョン) 2 件 (0.3%) の順となっている。

2019年10月以降発生した坡州 (パジュ) 北部、漣川 (ヨンチョン) 北西部、鉄原 (チョルウォン) 北部地域は、最近 ASF 検出件数が大幅に減った。一方、漣川 (ヨンチョン)

東部、華川（ファチョン）中部、楊口（ヤング）北部および高城（コソン）北東部地域は、今年に入り新たに確認されてから現在まで発生が持続している。

遺伝子分析の結果、国内野生イノシシから検出された 500 件余りの ASF ウイルスは全て遺伝型 II（Genotype II）\*であることが確認された。

\*ASF ウイルス遺伝子型 II は、東ヨーロッパ（ジョージア共和国）で発生し、ヨーロッパとアジア地域（中国、ロシア、モンゴル、ベトナム等）へ伝播したもの

これはロシアと中国等で流行している ASF ウイルスと同一である。

ロシア・中国で流行中である ASF ウイルスが非武装地帯近隣境界地域へ侵入したと推定される。

各発生地域の最初の発生地点および拡散様相を分析した結果、鉄原（チョルウォン）、漣川（ヨンチョン）、坡州（パジユ）は全て南方限界線から 1km 内で発生が始まった。

\*初発地点から南方限界線までの距離：9 月 26 日鉄原（チョルウォン）0.4km、9 月 30 日漣川（ヨンチョン）0.5km、10 月 9 日漣川（ヨンチョン）1km、10 月 11 日坡州（パジユ）0.2km

今年 4 月 3 日初発となった高城郡（コソングン）も南方限界線に近い地点（約 0.2km）で ASF ウイルスが検出され、今年 2 月に実施した非武装地帯環境調査でもウイルスが検出された。

\*非武装地帯を出入りする車両（2020 年 2 月 5 日、坡州（パジユ））と非武装地帯内の水溜まり（2020 年 2 月 13 日、楊口（ヤング））から ASF ウイルス遺伝子検出

国内侵入経路は河川、媒介動物、人および車両等の可能性があるが、正確な侵入経路の特定のためにはさらなる調査が必要である。

国内侵入後の発生地域内での伝播経路は、主に感染したイノシシまたは感染死体への接触と推定される。

イノシシ間の感染は、寝床や餌の共有、繁殖行動等における接触を通じて起こされる。

感染イノシシの糞尿や唾液等で汚染された環境に他個体が接触することも感染拡大の一因となる。

\*2019 年 12 月 3 日～2020 年 4 月 6 日、糞便、土壌、木の葉等 32 件の環境検体から ASF ウイルス遺伝子検出

イノシシが感染した死体のおいをかいたり、死体周辺の土を掘り起こし、死体のウジを摂取する過程でも感染することがある。

一方、既存発生地域から遠く離れた（7～33km）華川郡（ファチョンゲン）豊山里（プンサンリ）、漣川郡（ヨンチョンゲン）釜谷里（プゴンニ）、楊口郡（ヤングゲン）等における一部発生事例は、狩猟活動や人、車両移動等人為的要因があると推定され、今後、伝播経路の綿密な調査が必要なことが判明した。

\*2003年ドイツで調査された資料によると、狩猟は自然伝播に比べ最大7倍拡散を誘発するという（WildlifeBiology9（Suppl1）、2003年1月）

イノシシ移動遮断のために設置したフェンスは、イノシシASFの拡散の遮断・遅延効果があると分析された。

坡州（パジュ）、漣川（ヨンチョン）、鉄原（チョルウォン）、華川（ファチョン）地域のASFウイルスは、今年4月30日まで設置された18個の2次フェンスの中で主に検出されている。

\*ASFの自然・地理的拡散は1ヶ月に約1～3kmの速度（イノシシのASF生態と遮断防疫、FAO/OIE、2019）

境界地域を東西に横切る広域フェンスは、約99.5%の遮断効果があることが明らかになった。

\*2020年4月30日現在、ASFウイルスが検出された585件中、広域フェンス内の検出は582件（99.5%）

チャン・ユンソク国立環境科学院長は、「今後の疫学調査・分析を通じ、正確な侵入および伝播経路を特定し、効果的な防疫対策に貢献したい」とし、「今年上半期中に国立野生動物疾病管理院（仮称）の早急な開院を通じ、常時迅速な疫学調査が可能な体制を備える予定」と明らかにした。

一方、4月29日～5月6日の8日間で、野生イノシシのASFが24件追加で発生した。同期間検査した検体247件（死体117件、捕獲個体130件）中、陽性となった24件は全て死体検体であった。これで2019年10月初発から現在までで合計604件となった。

以上